URP Osaka City University
Newsletter
Issue 35, May.2017
大阪市立大学 都市研究プラザ ニューズレター第 35号 2017 年 5 月

大阪市立大学「特色ある共同研究拠点の整備の推進事業（先端的都市研究拠点）総括シンポジウム
第２回 URP 特別研究員（若手・先端都市）合評会
Osaka City University's Platform for Leading-Edge Urban Studies Symposium
2nd Annual Workshop for URP (Young, Leading-Edge Urban) Special Researchers

2 月 11 日（土）、本学高原記念館学友ホールにおいて、「大阪市立大学先端的都市研究拠点事業総括シンポジウム」が実施された。

都市研究プラザ（URP）は、2014 年より文部科学省「共同利用・共同研究拠点」の認定を受け、同拠点事業を実施している。あわせて「特色ある共同研究拠点の整備の推進事業～スタートアップ支援」の対象拠点に採択され、先端的都市研究拠点としての活動を国内外の学術機関や自治体等と連携のうえで展開している。この拠点活動の目的は、世界およびアジアの都市をフィールドに据え、文化創造と社会包摂に資する先端的都市論を構築する共同研究と研究拠点の形成を行い、「21 世型のレジリアント（復元力に富んだ）都市のあるべき理念モデルと実践モデルを彫琢していくことである。

今回のシンポジウムは、「特色ある共同研究拠点の整備の推進の事業」の 3 カ年の活動を、若手研究者、共同研究者、連携する海外学術機関・行政機関の報告を交えて振り返るとともに、拠点機能のさらなる強化・充実を展望するものとして企画したものである。

当日は、1 部「共同研究拠点の意義、拠点事業成果および若手研究者の活動報告」と、2 部「共同利用・共同研究、学術・行政機関連携の展開と拠点の将来像」の 2 部構成で開催した。

1 部は、荒川哲男本学学長の開会あいさつにはじまり、つづいて文部科学省研究振興局学術機関課学術研究調整官の石崎宏明氏より、同事業の趣旨ならびに URP する期待を述べていただいた。つづいて、若手特別研究員 4 名より、URP に在籍したことでの研究ネットワークや研究内容の幅が広がった経験などの報告がそれぞれ行われた。あわせて、海外連携学術機関であるソウル大学アジアセンターからの発表と、学術連携に対する期待が述べられた。

休憩後の 2 部は、各学術機関等とで実施している共同研究プロジェクトのうち 4 件の成果報告が行われた。ついで、URP の研究活動と連携する府下自治体からの連携への期待についての発表が 2 件行われた。

これらの発表報告を受けて、阿部昌樹都市 URP 所長と全泓奎 URP 教授より、今後の URP の拠点活動の展開と将来像の方向性が提示された総括討論が行われ、最後は、本学の櫻木弘之副学長の閉会挨拶でシンポジウムを閉めた。

なお、本シンポジウム前日には、URP 特別研究員（若手・先端都市）合評会が行われ、多様な研究領域からの学際的な活発な議論が展開された（次頁参照）。

■鄭栄鎭（URP 特任助教）

On the 11th February the "Osaka City University's Platform for Leading-Edge Urban Studies Symposium" was conducted at the Takahara Memorial Hall. This symposium reflected on the three years of the Promotion Program for the Strengthening of Platforms for Distinctive Collaborative Research's activities with presentations by young researchers, research collaborators, and cooperating foreign academic organizations/government agencies. Furthermore, it aimed to open perspectives for strengthening and enriching the platform's activities. An invited lecture from the MEXT, presentations of young research fellows and cooperating foreign academic organizations, and four reports from collaborative research projects were held. Presentations about the expectations on collaborations between the URP and local municipalities followed.

▼第 2 回 URP 特別研究員（若手・先端都市）合評会（2 月 10 日開催）

□開催挨拶

阿部昌樹（URP 所長）

□Session1

・沼田里衣：「障害者を含む音楽グループによる舞台活動－参加の倫理と美的価値観を巡って－」

・アサダワタル：「表現的実践を通じた「ケア観」の変遷にまつわる研究－大阪府堺市 kokoima でのアクションリサーチから－」

・島﨑未央：「近世幾内における油の流通構造－法と社会の視点から－」

・ヒメネスホセリトラナラ：「A Social ontology of "Hidden" Migrants in Osaka City」

・三田智子：「身分的周縁論とかわた村研究」

□Session2

・川口夏希：「フランスの都市問題と参加型都市計画（ウルバニズム）」

・水野延之：「フランス革命期マルセイユと移民」

・黒澤悠：「創造産業のポリティクス－コンヴァシオン理論の観点から－」

・岡戸香里：「伝統芸術の新たな存在意義－コミュニティへの社会包摂的な応用と災害前後の役割－」

・ロミチ イヴァン：「Functional Diversity in Keihanshin Metropolitan Area」

□Session3

・河野康治：「関一の田園都市理念の実践に関する研究」

・彌吉惠子：「イタリアにおける「他者」のための精神医療－他者性の是非をめぐる精神保健従事者たちの理論と実践－」

・蕭閎偉：「住民・地域の自立に向けた包摂的まちづくりに関する研究－公営住宅および低廉民間賃貸住宅地域の実例を中心に－」（資料発表）

・武岡暢：「「自立主義的生活規範」から見る「ジョブ」概念－西成データアーカイブ資料から－」（資料発表）

▼大阪市立大学「特色ある共同研究拠点の整備の推進事業（先端的都市研究拠点）総括シンポジウム（2 月 11 日開催）

第 1 部 共同研究拠点の意義、拠点事業成果および若手研究者の活動報告

□開会挨拶

荒川哲男（大阪市立大学学長）

□事業成果報告

阿部昌樹（URP 所長）

□文部科学省講演

石崎宏明（文部科学省研究振興局学術機関課学術研究調整官）

□若手特別研究員（在籍者･修了者）の活動報告

～キャリアアップと研究の新たな展開を支援する人材育成事業～

西野雄一郎、志賀信夫、メリチ・クルムズ、掛川直之

第 2 部 共同利用・共同研究、学術･行政機関連携の展開と拠点の将来像

□海外連携学術機関からの報告

ソウル大学校アジアセンター

□連携府下自治体からの報告

堺市、八尾市

□共同研究プロジェクトの成果報告

山田創平（京都精華大学）、安田恵美（國學院大學）、

上田僻奈代（NPO こえとことばとこころの部屋）、

中山徹（大阪府立大学）

□総括討論

～アジア型包摂都市論を創発する国際共同研究拠点の形成～

阿部昌樹（URP 所長）、全泓奎（URP 専任教授）

□閉会挨拶

櫻木弘之（大阪市立大学副学長）

司会・タイムキーパーは箱田徹（URP 特任助教）、綱島洋之（URP 特任助教）、鄭栄鎮（URP 特任助教）が交替して務めた。

2 月 10 日（金）、高原記念館・学友ホールにて、本年度第二回目となる、都市研究プラザ URP 特別研究員（若手）による合評会が開かれた。

当日は、12 人が研究発表を行った。午前中は、沼田里衣が障害者の音楽参加のあり方と音楽形態との関連について発表し、アサダワタルが NPO 法人 kokoima の事例を取り上げ、「ケア」の現場における「ケア観」の変遷過程について発表した。続いて島﨑未央は、近世堺油市場における取引関係の構築とその背景について、ヒメネス・ホセリト・ラナラは、「隠れた」移民という今日の移民をめぐる状況に関する研究について発表し、午前の最後は、三田智子が、身分的周縁論の展開と、そうした視角から捉えた泉州南王子村について論じた。

午後の部では、川口夏希がフランス・リール地域で近年みられている市民参加型の都市計画の動きとその背景について、水野延之がフランス革命期のマルセイユのイタリア系移民の状況と今後の研究計画について、黒澤悠が、インタビュー調査を踏まえて今日の創造産業従事者を取り巻く状況ついて、それぞれ発表した。岡戸香里は、インドネシアのガムランを取り上げ、伝統芸能であるガムランの今日的な存在意義について論じた。ロミキ・イヴァンは、複雑性や多様性にフォーカスする研究動向を踏まえ、京阪神大都市圏の機能的多様性について論じた。河野康治は、大大阪時代、関一の住宅政策とその背景にある田園都市理念について発表した。彌吉惠子は、イタリアにおける「他者」である移民に対する精神医療に関する研究動向と今後の研究の展望について発表した。

諸事情により、予定よりも発表者が 2 人少なくなったにも関わらず、当初予定されていた時間まで合評会が続くなど、活発な議論が行われた。多岐にわたる学問領域や研究分野に属する参加者間のディスカッションによって、それぞれの発表者が、自身の研究に対する新たな視角や刺激を得られる有意義な場となった。

■川口夏希（URP 特別研究員〔若手･先端都市〕）

On 10 February 2017, Urban Research Plaza organized the 2nd annual workshop for URP Research fellows in Takahara Memorial Hall, Osaka City University. The day-long workshop had 12 presentations, and the participants in diverse disciplines shared a lively discussion. It would be a great opportunity for the presenters to get new inspirations for their future works.

EU 文化首都・国際シンポジウム：バレッタ 2018（マルタ）
Cities as Community Spaces

昨年 11 月 23-25 日の 3 日間、マルタ・バレッタで第三回目の年次国際シンポ *Cities as Community Spaces* が開かれた。まず、バレッタ 2018 財団会長である Jason Micallef 氏によるスピーチを皮切りに、欧州委員会マルタ代表の Elena Grech 氏、欧州諸国のマルタ大使や Tania El Khoury 氏などの芸術家、欧州を中心とする都市研究者が熱弁をふるった。

「研究セッション」では、文化コミュニティの祭典活動と解放、通りに焦点を当てた公共空間と私的空間との交わり、コミュニティをつなぐ都市の記憶のキュレーション、地域主導のスペース作りの在り方や隣接地域と競合する場合の解決策、創造的なコミュニティのための語り掛けの方法など、危機に直面するＥＵの現状を踏まえた方策が議論された。

岡野は「植物社会デザイン：多文化・多専門領域・多国家レベルのアクターネットワークによる学習」と題する報告を行った。都市のレジリエンスを、定型性と自由度、即興性、リズムと拍子の観点から、都市間の植物文化が取り持つ関係性を「文化編集」の方法論によって示した。

最終日の「バレッタは住みやすい都市か？」のセッションでは、出窓のバルコニーのデザインや色を中心に景観を統一しようとする地方政府と、近隣とは異なるデザインを望む住民（特に女性）との意見対立など、興味深い論議が繰り広げられた。アラブやイタリア、イギリスなど多様な文化が埋め込まれたバレッタの建築様式の中で、バルコニーの独自性は女性にとって重要な意味を持つものであるという。多様な価値観や伝統のせめぎ合いのなかで、異質な文化が共存する社会空間をいかに構築するかとともに、それぞれの文化を引き継ぎまた、都市と都市（地域）とをコミュニケートし共存する理論的枠組みが求められている。

岡野が Andy Pratt 教授（ロンドン市大）と編集する国際学術誌 ***City, Culture and Society***（CCS, Elsevier 社）のセクション Urban Creativity Forum に、バレッタ財団の Kaesten Xuereb 氏から寄稿いただいた。また、イタリアの Pier Luigi Sacco 教授・Xuereb 氏および Vella Gaziella 氏編集によるバレッタ 2018 特集号を予定している。

最後に、トップジャーナルである *Urban Studies* 誌の編集長を 25 年務めてきた Ronan Paddison 教授（グラスゴー大学）も招聘され、長年の編集についての知見に触れることができた。同誌と CCS とのコラボレーションや、私が編集長である単行本シリーズ ***Creativity, Heritage and the City*** (Springer 社)を用いての欧州文化遺産の著作やシンポジウム開催を企画したい。

■岡野浩（URP 専任教授／経営学研究科併任教授）

マルタの首都バレッタでの統一セッション

From 23rd to 25th November 2016 the annual international symposium “Cities as Community Spaces“ was held in Valletta (Malta) for the third time. At this occasion Professor Okano gave a speech entitled “Botanical social design: Multi-cultural, multi-professional and multi-national learning by actors’ network”. Professor Ronan Paddison (University of Glasgow) who has served for over 25 years as chief editor of the world’s leading journal “Urban Studies” was invited to collaborate with “City Culture and Society” and the publication of a book about the European cultural heritage in the Springer series “Creativity, Heritage and the City”, employing Professor Okano as managing editor, together with a symposium were planned.

ソウル市立大学での国際ジャーナル IJUS 創刊 20 周年記念シンポジウム
Urban Sciences and IJUS: Past and Future

本年 1 月 10－11 日の両日において、ソウル市立大学が発行する *International Journal of Urban Science*（*IJUS*）の創刊 20 周年を記念して、国際シンポジウム"Urban Sciences and IJUS: Past and Future"が開催された。IJUS は 4 年前から紀要から、Routledge が発行する国際ジャーナルに移行したとはいえ、主要な編集委員や執筆者の大半が韓国人によるものであり、国際化が最重要課題であると彼らも認識しており、実質的な「国際ジャーナル」に移行させるかについての議論に集中した。

まず、都市研究のトップジャーナル *Urban Studies* の編集長である Jon Banister 教授とともに、岡野が基調講演として、ロンドン市大の Andy Pratt 教授とともに編集する *City Culture and Society*（*CCS*）の経験を披露した。

第 1 ステージ（2010-2020）：都市研究の枠内で多様な学問領域との連携を図る（Multi-Discipline, Inter-Discipline）。確立されたトップジャーナルとのコラボを推進する。CCS をサポートする協会を設立する（都市創造性学会 AUC）。Springer 社から単行本シリーズ Creativity, Heritage and the City の創刊。

第 2 ステージ（2020-2030）：都市研究の枠を出て、多様な学問領域との融合を図るとともに、新たな方法論や領域（Botanical Social Design など）を創出する（Trans-Discipline）。単行本シリーズの刊行を進めながら、ハンドブック（全 3 巻、1200 頁程度）と百科事典（全 1 巻、1200 頁程度）の刊行なども検討する。

国際ジャーナルは、(1)インパクト、(2)スピード、(3)リーチの 3 項目から評価される。インパクトは、Citescope、Impact factor、SJR、スピードは査読スピード、オンラインに論文がアップされる時間、 そして、リーチはダウンロード数から構成される。CCS の最新データは、CiteScore: 0.83、Source Normalized Impact per Paper (SNIP): 0.776、SCImago Journal Rank (SJR): 0.389 であり、都市研究誌では 38 位にランクされている（*Urban Studies* は 4 位、*IJUS* は 54 位）。

CCS の最初の 10 年は、世界の都市研究者の創造的空間としていかに確立するかに重点を置いた。というのも、国内の著者に重きを置いた特集号においては、(1)インパクトを与えることができなかったことの反省の結果である。社会科学と自然科学、人文科学のバランスを志向しつつ、"Urban Creativity Forum"というセクションを設け UNESCO の Francesco Bandarin 副事務局長を編集長に招聘するなど、都市計画家やデザイナー、芸術家などの専門家による実践的成果を取り込むことも試みてきた。また、Cultural Mapping, Cultural Editing, Networks and World Heritage など、創造性や文化ビジネスについての特集号を数多く編集している。

午後からの個別論題では、アメリカで活躍している韓国人の研究者や実務家による報告がなされ、活発な議論がなされた。２日目には清渓川の復活プロジェクトについての博物館を視察した。世界的に知られている清渓川の取り組みであるが、新たなステージについての検討がなされつつあることは注視していきたい。

■岡野浩（URP 専任教授／経営学研究科併任教授）

도시과학국제저널(IJUS) 20주년 기념 국제세미나

세계와 한국의 도시과학 학술연구와 IJUS의 발전방향

◆ 날짜: 2017. 1. 9 (월) – 1. 11 (수)
◆ 장소: 서울시립대학교 자연과학관 국제회의장

프로그램

첫째날. 1월 09일(월)

15:00~15:30	등 록
15:30~17:30	IJUS 발전방안 회의
18:30~	환영 만찬

둘째날. 1월 10일(화)

09:00~09:30			등 록
09:30~09:40	개 회 사		강영구 (IJUS 편집위원장 / 서울시립대 교수)
09:40~09:50	환 영 사		원윤희 (서울시립대 총장)
09:50~10:00	축 사		김홍배 (대한국토·도시계획학회 회장)
10:00~10:10			휴 식
IJUS의 20년 회고와 발전방안			
10:10~10:50	특별세션	발표1	Jon Bannister (Prof., Manchester Matropolitan University / Editor in Chief, Urban Studies)
10:50~11:30		발표2	Hiroshi Okano (Managing Editor, City Culture and Society / Prof., Osaka City University)
11:30~12:30		토 론	좌장: 강영구 (서울시립대 교수)
12:30~14:00			점 심
도시과학의 새로운 동향			
14:00~14:30	세션 I 도시계획	발표1	김재홍 (Professor, Univ. of California, Irvine) *Getting Institutions "Spatially" Right*
14:30~15:00		발표2	이윤석 (서울시립대 교수) *Who are they and how do they live?: Chinese immigrants in an ethnic enclave in Seoul*
15:00~15:30		토 론	좌장: 김의준 (IJUS 편집위원장 / 서울대 교수)
15:30~15:40			휴 식
15:40~16:10	세션 II 도시교통	발표1	김의준 (IJUS 편집위원장 / 서울대 교수) *Estimating Spillover Effects of Asian Highway Development on Economies of Northeast Asia: Counterfactual Analysis*
16:10~16:40		발표2	정구홍 (Dr.,California Dept. of Transportation) *Discussion of Challenges in Improving the Safety of Roadways*
16:40~17:10		토 론	좌장: 김재홍 (Professor, Univ. of California, Irvine)
17:10~17:30			폐 회
18:30~			저 녁

셋째날. 1월 11일(수)

09:00~12:00	현 장 답 사	청계천 박물관 & 청계천
12:00~14:00		점 심

小円座「大坂の都市開発／道頓堀／国際交流」
Roundtable : ”Urban Development of Osaka / Dotonbori / International Exchange”

2017 年 1 月 28 日（土）、大阪市立大学経済学部棟において、小円座「大坂の都市開発／道頓堀／国際交流」が開催された（三都研究会・近世大坂研究会・都市文化研究センター［UCRC］・都市研究プラザ［URP］都市論ユニット共催）。科研費・基盤研究（B）「三都の巨大都市化と社会構造の複合化に関する基盤的研究」（2016 年度～・研究代表塚田孝［文学研究科教授］）では、第一に、日本近世の都市社会史研究の現段階に立ち、三都（江戸・京都・大坂）の固有の社会構造を明らかにすること、第二に、世界の各都市との比較を行い、巨大都市形成の世界史的特徴を探ることを目的としている。特に、2012 年に新たに見出された安井九兵衛関係史料（遠藤亮平氏・安井洋一氏所蔵、大阪歴史博物館寄託）を用いて道頓堀の社会＝空間構造に迫る取り組みは、大坂の周縁部の拡大と社会構造の複合化のプロセスを明らかにするものであり、本科研の基軸でもある。

また併せて、海外の日本史研究者や国内・海外の世界史研究者との交流を深めてきた。そこで、今回の小円座では「大坂の都市開発」、「道頓堀」、「国際交流」をキーワードとし、特に道頓堀をひとつの媒介項として、大坂における都市史の研究蓄積と研究・教育の方法論について議論することを意図した。まず、道頓堀を素材としてイェール大学で卒業論文を執筆し、併せて展示を企画したジョン・ダミコ氏から、アメリカにおける卒業論文執筆指導と日本史研究の特徴について紹介いただいた。次に八木滋氏（大阪歴史博物館）からは、近世都市大坂の形成過程の諸段階と類型を整理し、秀吉の城下町建設以前からの「古町」であり、上町に位置する農人橋詰町の社会＝空間構造に迫る報告を得た。塚田孝氏は、芝居地である道頓堀の特徴を探るべく歌舞伎役者の褒賞関係の史料を分析し、民衆世界を形成する芸能者の存在形態と天保改革の芸能統制の限界についてコメントをした。フロアには国内・海外の日本史研究者のほかトルコ史研究者の参加も得、それぞれの分野での研究の傾向、交流の状況や、一次史料を用いた教育のあり方についても活発な議論が交わされた。

■島﨑未央（都市文化研究センター）

URP 先端的都市研究ブックレットシリーズ刊行
URP Leading-Edge Urban Studies Booklet series

都市研究プラザは 2014 年に「共同利用・共同研究拠点としての認定を受け、これまでプラザが蓄積してきた研究や学術資源を、地域や一般社会、連携研究機関とさらに共有・協力していくプロセスを重視し、各連携研究機関が積み上げてきた都市研究における先端的取り組みをスケールアップしていくための連携型拠点として整備を図っている。このたび、その成果の一部として、先端的都市研究ブックレットシリーズを計 4 冊刊行した。

■鄭栄鎭（URP 特任助教）

※ご関心のある方は下記までご連絡ください。ただし部数に限りがありますので、ご希望に添えない場合があることをご了承ください。

連絡先：先端的都市研究拠点事務局
joint_office@ur-plaza.osaka-cu.ac.jp

都市研究プラザ 10 周年記念論文集『包摂都市のレジリエンス』の刊行
Urban Research Plaza 10th Anniversary Papers "Resilience of The Inclusive City"

都市研究プラザ創設 10 周年を記念した論文集『包摂都市のレジリエンス』が、阿部昌樹、水内俊雄、岡野浩、および全泓奎の 4 名を編者として、2017 年 3 月 31 日に水曜社より刊行された。

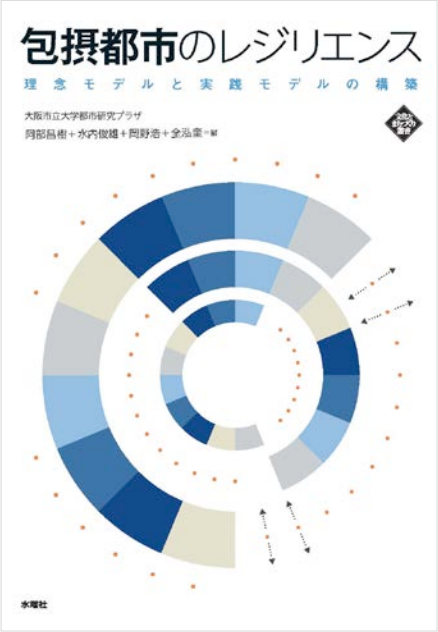
この論文集は、「第 I 部・包摂型創造都市とレジリエンス都市の創生」、「第 II 部・都市空間再生に向けた包摂型アートマネジメントと多文化都市」、「第 III 部・包摂型アジア都市と居住福祉実践」という 3 部構成となっており、都市研究プラザの研究活動において中心的な役割を担ってきた諸分野の研究者の、計 17 本の論文が収録されている。いずれも、この論文集のために新たに書き下ろされた論文である。

都市研究プラザではこれまで、2007 年度から 2011 年度までの 5 年間は、グローバル COE プログラムの研究拠点のひとつとして、「文化創造と社会的包摂に向けた都市の再構築」をテーマとした共同研究に取り組み、2014 年度から 2016 年度までの 3 年間は、「先端的都市研究拠点」として、「21 世紀型のレジリアント（復元力に富んだ）都市」のあるべき理念モデルと実践モデルの彫琢に取り組んできた。本論文集は、競争的外部資金を獲得して取り組んできたそれらのプロジェクトが、どのような研究成果に結実してきたのかを伝える内容となっている

都市研究プラザが研究成果を論文集のかたちで公刊するのは、佐々木雅幸と水内俊雄を編者とする『創造都市と社会包摂』を 2009 年 7 月に水曜社より刊行して以来のことである。この『創造都市と社会包摂』と新たな『包摂都市のレジリエンス』とを読み比べるならば、この間、都市研究プラザが学際的な都市研究組織として何を目指し、何を実現してきたのかを概観することができるはずである。

本論文集が、学際的な都市研究に関心を有する多くの研究者と、都市の現状を問題視し、その改革に取り組んでいる多くの実践家に読まれることを願ってやまない。

■阿部昌樹（URP 所長／法学研究科教授）



The festschrift "Resilience of the Inclusive City" was published to honor the 10th anniversary of the Urban Research Plaza's foundation. The book compiles 17 newly written articles from researchers representing all fields of central role for the Urban Research Plaza's research activities. We expect that this book is of interest to many researchers and people working in related fields.

■イベント情報

子どもの貧困対策セミナーvol.1

「地域で考える子どもの貧困」

―成育環境が不利な子どもの支援策を考える―

日　時：2017年6月28日（水）18:30～20:00
場　所：大阪市立大学学術情報総合センター
参加費：無料
定　員：60名

＊詳細は都市研究プラザウェブサイトでごらんください。

URP Osaka City University 大阪市立大学 | Urban Research Plaza 都市研究プラザ

「都市研究プラザ」は、都市再生へのチャレンジとして大阪市立大学が 2006 年 4 月に設立した全く新しいタイプの研究教育組織です。「プラザ」という名前が示すように、都市をテーマとする人々が出会い、集まる広場をめざしています。先端的都市研究拠点として、現場や海外での研究・まちづくり活動、さらに、世界第一線級の研究者や政策家と国際的なネットワークを構築しています。

http://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp/

大阪市立大学都市研究プラザ　ニューズレター　第 35 号
編集長（発行責任者）阿部昌樹
副編集長　全泓奎　水内俊雄　岡野浩
編集主幹　鄭栄鎭　尾形由記

〒558-8585 大阪市住吉区杉本 3-3-138　tel.06-6605-2071
e-mail：office@ur-plaza.osaka-cu.ac.jp
所長　阿部昌樹　　副所長　全泓奎　林久善
ユニット長　1U 阿部昌樹　2U 嘉名光市　3U 水内俊雄　4U 岡野浩